

番号
名前

II 次の文章を読み、後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に記入すること)

A キリスト教の土着化ということは、日本のキリスト教が、真に日本人でありあるいは東洋人であるわれわれ自身にとって、深く内在的生命的にならなければならないという問題である。従来キリスト教が、西洋人にとって「イ」的な世界宗教であったということが、必然的且つ積極的意味をもっていたとすれば、へ1)、東洋人にとっては、それが東洋的な世界宗教となるということが、必然的かつ積極的意味をもち得るであろう。しかし今やわれわれが、西洋的な世界宗教としてのキリスト教の限界を問題にしなければならぬ時に当たって、「ロ」的に、キリスト教を、へ2)、東洋的な世界宗教たらしめようと考えるとすれば、それは過っているといわなければならないであろう。

B 端的に言って、キリスト教が真に「ハ」的・世界的宗教であるためには、それが、一面においては、西洋的な世界宗教であり、また東洋的な世界宗教でもあり得るし、またそうでなければならぬという意味がある。同時に、へ3)、それは、単に西洋的な世界宗教でも単に東洋的な世界宗教でもあり得ないし、またそうあるべきではない。ということが含まれていなければならない。へ4) そのような考えを前提とした上で、われわれは、キリスト教の土着化について正當に語り得るであろう。

C それには種々の理由が挙げられ得るであろうが、いま特に二つの点を述べるとするならば、第一に、キリスト教を受容した日本人の層が、特に日本の宗教的・文化的伝統から(1)ソガイされた都市的・中間知識層に偏しておらずに受容するに急であつたこと、第二に、そのような西洋的世界宗教としてのキリスト教のもつ「ニ」的の自己優越性の意識によるところがあるということ、挙げなければならぬと思う。キリスト教の土着化のためには、以上の第一の点が深く自己反省されなければならぬと共に、第二の点においても、新たに打開さるべき問題が横たわっていると思われる。

D さて従来日本のキリスト教会もキリスト教信徒も、「ホ」的にいって、キリスト教以外の諸宗教に対して、へ5) 無関心であるという傾向をもっていたと思われる。へ6) 自らのものとして当然顧みられるべき日本の貴重な一(2)それは日本文化の最も深い面における想像力として働いてきたものである一宗教的伝統に対してすらも、はなはだ無関心であつたといえる。

(武藤一雄「宗教哲学の新しい可能性」より)

問一 A、B、C、Dについて、Aは冒頭だが他は順序を変えている。順序を正しく並べたものは1、3の内どれか選び、符号で記せ。

- 1 A I D I C I B 2 A I B I D I C 3 A I C I D I B

問二 「イ」く「ホ」に入れるのに最も適切なものを、次の中から選び符号で記せ。

- ア 反動 イ 西洋 ウ 排他 エ 人類 オ 一般

問三 へ1)へ6)に入れるのに最も適切なものを、次の中から選び符号で記せ。

- a そして b 特に c 同様に d 単に e 他面において f きわめて

問四 傍線(1)「ソガイ」という漢字は、それぞれ次のどれに該当するのか。適切なものを選び符号で記せ。

- ① ソは ア ソ上 イ ソ遠 ウ 質ソ エ 免ソ
- ② ガイは ア 対ガイ イ 大ガイ ウ ガイ虫 エ 弾ガイ

問五 「X」に入れるのに最も適切なものを、次の中から選び符号で記せ。

- 1 空間的 2 環境的 3 時間的

番号
名前

問六 本文を読み、作者の主張を最も反映しているものはどれか。次の中から一つ選び符号で記せ。

- a 日本のキリスト教は、日本人にとって深く内在的な生きたまものとなるのが最も大切である。
b 日本のキリスト教は、もっと日本の文化や諸宗教を学び、これと調和し、融合し、日本的な宗教にならなければならない。
c キリスト教は西洋的とか東洋的とかというのではなく、他の諸宗教を受け入れ、より普遍的世界的なものになるべきである。

問七 傍線(2)「それ」の指示するものを書け。(五字以内)

問八 本文の主題に最も適切なものはどれか。次の中から選び符号で記せ。

- 1 キリスト教の限界 2 キリスト教の土着化 3 世界宗教の在り方

問九 次の文学作品の内、①宗教性の高い作品を一つ選び、また②彼岸過迄の作者を選び、それぞれ符号で記せ。

- ① イ 彼岸過迄 口 阿部一族 ハ 地獄変 ニ 沈黙
② イ 森鷗外 口 島崎藤村 ハ 夏目漱石 ニ 田山花袋

Ⅲ 次の文章を読み、後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に記入すること)

A 1964年の秋、東京五輪の開会式で世界の目を集めた聖火台には、外観も寸法も同じ台がもう一つある。同じ工房で作られた、型枠も同じ、いわば聖火台の兄弟ながら、先に作られた兄の方は失敗作だった▼「型枠のポルトが飛び、溶かし入れた鉄がこぼれ出した。①チメイテキでした」。事故をふりかえるのは埼玉県川口市の鑄金工芸家、鈴木昭重さん(83)。いまから60年前の二月のことだ▼もとは58年のアジア大会用にと発注された。鑄物としては②ハカクの大きさで「納期三ヶ月、予算20万円」。各社が尻込みする中、父の方之助さんが「鑄物仕事は損失ばかりじゃない」と引き受けた▼B 梵鐘や天水鉢の名品の数々を手がけてきた方之助さんにとって、事故は一代の③フカクだった。④シンロウから床につき、なくなったのは(1)事故の数日後。68歳だった。残された型枠を使い、三男の文吾さんが後を引き受け、家族総出で間に合わせた▼そちらの聖火台(弟)の以後の活躍は(2)○○○知られている。五輪で人びとの目を釘づけにし、長く国立競技場を見守った。今は被災地・宮城県石巻市で復興を⑤ハゲます。建設中の国立競技場の一角に飾られることも決まっている。一方の「(3)」はというと、⑥ホシユウウされ、生を受けた川口市内の小さな公園にひっそりとたたずんでいる。人に運と不運があるように、鑄物に運と不運があっても不思議ではない▼さて次の東京五輪が二年後に迫った聖火は列島をどう運ばれ、開会式でどんな台に灯されるのか。関心は尽きない。

(『天声人語』平成三〇・一〇・十一)

問一 傍線①く⑥のカタカナを、漢字に直せ。

問二 Aの文中に言葉の誤りがある。それを抜き出し正字で書け。

問三 日の文中の(1)「事故」とは何か。全文中の中からそのまま抜き出せ。(句読点を含む、二十五字以内)

問四 傍線(2)「○○○」に入る適切なものを、次の中から選び符号で記せ。

- ア いまだ イ まさに ウ つとに

問五 「(3)」に入る適切なものを、次の中から選び符号で記せ。

- ア 弟 イ 兄 ウ 家族

配点

II

問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
① ニ	2	② 宗	C	X 3	① イ	1 c	イ	2
② ハ	4点	教	4点	4点	② ア	2 d	ア	4点
2×3点=6点		的			2×3点=6点	3 e	ハ	
		的				4 a	エ	
		伝				5 f	ニ	
		統 ₅				6 b	ウ	
		4点					ホ	
							オ	

問四	問 ₍₁₎ 三		問二	問一
② ウ	た	型 ₁	損失 (誤) ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ 損失得 (正)	① 致命的
問五	鉄	枠		② 破格
③ イ	が	の	4点	③ 不覚
2×4点=8点	こ	ボ		④ 心労
	ぼ ₂₀	ル ₅		
	れ	ト		⑤ 励(ます)
	出	が		
	し	飛		⑥ 補修
	た	び		
	。 ₂₅	、 ₁₀		
	5点	溶		
か				
	し			
	入			
	れ ₁₅			

II

→6×3点=18点

番号
名前